

今月の逸品

NO.19 2016.10



鏡

長 290 mm × 幅 130 mm × 高 250 mm

鉄地に錫の象嵌を施した舌長鏡。鏡は人が馬に乗る際に足を乗せる馬具で、鞍の両側につり下げて用いられる。古墳時代に大陸から伝わった時の鏡は、円形または釣り鐘形をしていたが、その後、日本独自の発展を遂げていき、爪先に覆いをつけた壺鏡、舌と呼ばれる足を乗せる部分を後方にのばした半舌鏡、さらに踵の方まで舌をのばした舌長鏡などが登場したとされる。桃山時代から江戸時代においては、京都・加賀・近江・会津・知多など日本各地で装飾性の高い鏡が作られたが、この資料においても、10段の透かしを持つ紋板から笑み・柳葉・一文字にかけては流水文を、中央の稜線が高い鳩胸には6列の短冊形の上に梅花を散らした文様を、それぞれ象嵌で描いており、足を乗せる舌には朱漆が塗られている。装飾の美しさから考えて、近代の模作とみるよりは、神宝または武家・公家の実用品として江戸時代に製作されたと考えるのが適当だろう。この資料を収める箱には「家久作」「岡田」といった銘が存在するが、京都教育大学が所蔵するにいたった経緯も含めて、詳細はわかっていない。



鳩胸：梅花模様

